

留学生と日本人学生の自由会話に見られる 参加の対称性と非対称性

岩田 夏穂

要 旨

日本語を第一言語とする母語話者 (NS) と第二言語とする非母語話者 (NNS) の会話では、言語能力において強い立場にある NS が会話のイニシアチブを取ると考えられてきたが、実際に教育現場でのやり取りを見ると、多様な参加の様相が見られる。本稿では、発話の連鎖の仕方から会話参加の様相を明らかにするイニシアチブ - レスポンス分析を用いて、留学生と日本人学生のペア 5 組の自由会話に見られる参加のパターンを探り、さらにマイクロレベルの質的分析を通してそのパターンの背後にある特徴を調べた。その結果、2 組のペアでパターン的一致 (対称的参加)、3 組にパターンの不一致 (非対称的参加) が見られたことから、言語能力が参加の様相を決定するのではないこと、参加の対称性を左右するのは、談話推進のリソースとなる情報が両参加者から提供されるかどうかが重要であることがわかった。この結果から、自由会話という活動と NS と NNS の会話への参加の仕方に見られる特徴との関連を考察した。

【キーワード】 自由会話、留学生と日本人学生、参加の対称性と非対称性、イニシアチブ - レスポンス分析

1. はじめに

日本語教育の教室場面では、言語学習、交流、相互理解促進を目指して、日本語を第一言語とする母語話者 (native speaker 以下 NS) と第二言語とする非母語話者 (nonnative speaker 以下 NNS) がともに活動に参加する試みが行われている。筆者も、勤務先の大学に在籍する NS と NNS がコミュニケーションする場を提供する実践をしてきた。このような、いわゆる接触場面¹での会話参加の様相には、話題提供や相手からの発話の引き出し等、談話を推進する仕事を参加者全員が受け持ち、協力してやり取りを展開しているように見えるものもあれば、特定の参加者がその仕事を受け持つことで、参加者間でやり取りへの関与に差があるように見えるものもある。ここでは、暫定的に前者のような参加を対称的参加、後者を非対称的参加²とする。

このような多様な会話の様相は、参加者のどのような行為によって達成されるのだろうか。そのプロセスを詳細に分析した基礎研究は、現場での活動に起きている問題を分析する観点や、教師の介入や活動のデザインを改善する手がかりを得る上で有効であろう。しかし、日本語教育の分野における会話研究は、ある特定の言語形式や発話機

能の使用を調査するものが中心であり、参加の様相を相互行為の面から扱ったものは、まだ限られているようである。

2. 先行研究

2.1 会話参加を決める要因を探る研究

NS と NNS の会話参加を対象とした研究では、その言語能力の違いから、NS が会話の方向付けをコントロールすることが指摘された (Beebe & Giles 1984; Fan 1992 等)。これらの研究では、主に発話量や質問、導入した話題、割り込み等の頻度、あるいは参加を調整する戦略の頻度を指標として参加の様相が分析されている。

一方で、参加者の地位や立場が同等で、NNS のほうが話題に関する知識を多く持つ場合 (Woken & Swales 1989)、あるいは NNS の地位が NS より上の場合 (Zuengler & Bent 1991) を対象とした研究は、発話量や質問の頻度等を指標に、必ずしも NS が主導権を握るとは限らないと指摘している。

会話参加の様相は、言語能力や地位、話題の関連知識の他にも、参加者間の親疎関係や年齢、性差など、さまざまな要因が複雑に絡んでいると考えられる。したがって、参加の様相を決める要因

を特定するのは非常に困難であろう。

また、何を参加の指標とするかという問題もある。先述の研究では、個人の行為の頻度やストラテジーを参加の指標としていた。しかし、会話参加の様相における対称性や非対称性は、ある条件を備えた個々の参加者の振る舞いで決まるというよりも、参加者同士の発話の関わり合い、つまり発話連鎖を通して現れるものだと思われる³。Marková & Linell (1996) や Linell, Gustavsson & Juvonen (1988) が指摘するように、会話参加の対称性、非対称性のような相互行為的に達成される現象を個人の行為の頻度によってカテゴリーに分類し、静的な数量に固定化することで捉えるのは難しいと考えられる。

2.2 対話主義から見た会話の対称性と非対称性

2.1 で述べた会話参加についての問題意識の背景には、Linell たちを中心とする「対話主義 dialogism (筆者訳)」の理念がある。それは、対話においては「発言や行為とその文脈、表現と意味、自己と他者には、相互反映的關係がある (筆者訳)」(Linell 1998: 264) と捉える考え方である。

対話主義における参加の対称性と非対称性とは、どのようなものだろうか。Linell & Luckmann (1991) によると、非対称性とは、対話の本質であり、対話の局所的 (local) レベルから全体的 (global) レベルまで多様なところに存在する不等価性 (inequivalences) であるという。

局所的レベル (一つ一つの発話やターン、あるいは隣接した発話連鎖) に現れる非対称性は、多様な性質を持つ。相互行為のパターンとしての性質では、「話し手」と「聞き手」としての発話という非対称性、相手に何らかの応答を求める発話 (質問、依頼など) とそれに答える発話 (応答、承諾など) の間の非対称である。

また、話題に関する知識ややり取りにおける立場の非対称性もある。これは、参加者が所与に持つ専門性や社会的地位の差というよりも、やり取りの局所的レベルで非対称性が際立つ場合をさす。

この会話の局所的非対称性に注目し、日本語の会話を対象とした研究に西條 (2005) がある。これは、互いの属性・言語等の非対称性が局所レベルに現れたとき、その解消に選択される言語形式を調査している。分析は、接触場面と母語場面での日本語によるインタビュー場面の話題導入部を

対象に、そこに見られる話題開始・終了発話の局所的・全体的関係 (発話因子) と言語形式 (情報単位) を比較した。その結果、接触場面では、先行発話への応答と反復によって前後の一貫性が追求されること、文末叙述、提題、応答の高い生起頻度から、短い発話の多用によって「会話の進行と理解を管理」(P179) するという特徴があることを明らかにしている。

一方、全体的レベルの非対称性は、より長い談話や「トピック」「活動」等に相当する大きい連鎖で相互行為に見られるパターンの性質である。例えば、参加者 A と B の会話で、A が B の話した内容に関する質問をしたり、それに関する情報を提供したりした場合、A が B に働きかけているという点で非対称である。会話全体を通して A と B の参加の仕方がこのようであれば、全体的レベルで参加の様相は非対称的になると考えられる。しかし、B もまた A の話を踏まえた質問や情報提供を同様にすれば、全体レベルでの参加は対称的になるだろう⁴。つまり、局所的な互いの発話の踏まえ方 (発話連鎖の仕方) が連なって全体的な対称的、非対称の様相を形作るのである。

この発話連鎖の仕方は、個々の発話が持つ「応答的 (responsive)」側面 (先行談話を踏まえて産出される後方志向的性質) と、「開始的 (initiatory)」側面 (次の発話が産出されるコンテキストを作る前方志向的性質) という 2 面性 (Linell 1990 1998; Linell et al. 1988) に基づいている。そして、発話と発話が相互反映的に踏まえ合う連鎖から意味が共同的に構築されるという。

対話主義から見た対話の性質を踏まえ、参加の全体的様相を発話連鎖から捉えるカテゴリー分類のシステムが Linell et. al (1988) のイニシアチブレスポンス分析 (Initiative-Response analysis, 以下 IR 分析) である。次項でその概要について述べる。

2.3 イニシアチブレスポンス分析

IR 分析は、2.2 で述べた発話の後方志向的性質と前方志向的性質に注目し、発話同士の多様な結びつき方に基づいてコードをつける方法であり、相互行為の協同構築性と発話にコードによってカテゴリーへ分類するという分析方法の折り合いをつける一つの方向を示している。

2.3.1 カテゴリーへの分類の手順

IR 分析の分析単位は「ターン」で、これは、話し手がフロアを取り、次の話者交代までの時間に相当する発話である (Linell et al. 1988:417)。表 1 にターンをカテゴリーに分類する記号の説明をまとめた⁵。

ターンの特徴では、まず各ターンが持つイニシアチブ的性質 (談話を推進する) とレスポンス

的性質 (先行談話を受け止める) に注目する (表 1 ①参照)。イニシアチブ的性質は、相手への反応要求 (強いイニシアチブ。表 1 のカテゴリーの記号は \triangleright) と、新しい実質的な内容導入 (弱いイニシアチブ、 \triangleleft) を指す。イニシアチブ性がほとんどなく、先行隣接ターンに依存するレスポンス的性質が非常に強いターンは「最小応答 (minimal response)」である (\triangleleft)。

表 1 IR 分析のターン・カテゴリー (表中はターンを T と示す)

ターンの特徴	カテゴリーの記号	評価点	レスポンス的側面	イニシアチブ的側面
①基本的イニシアチブ・レスポンスの強弱	(1) \triangleright	6	ほとんどない	強い (相手の反応要求)
	(2) \triangleleft	5	ほとんどない	弱い (内容を導入)
	(3) $\triangleleft \triangleright$	4	先行隣接 T にリンク	強い (相手の反応要求)
	(4) $\triangleleft \triangleleft$	3	先行隣接 T にリンク	弱い (内容を導入)
	(5) \triangleleft	2	先行隣接 T にリンク	ほとんどない
②先行隣接 T 以外の特定の先行 T にリンク	(6) $\triangleright \triangleright$	5	先行隣接 T 以外の T にリンク	強い (相手の反応要求)
	(7) $\triangleright \triangleleft$	4		弱い (内容を導入)
	(8) $\triangleright \triangleleft$	3		ほとんどない
③自分の T にリンク	(9) \Rightarrow	4	自分の先行 T にリンク	強い (相手の反応要求)
	(10) $=\triangleleft$	3	自分の先行 T にリンク	弱い (内容を導入)
	(11) $\triangleleft \Rightarrow$	5	先行隣接 T を無視し、自己先行 T リンク	強い (相手の反応要求)
	(12) $\triangleleft =\triangleleft$	4	先行隣接 T を無視し、自己先行 T リンク	弱い (内容を導入)
③周辺の内容にリンク	(13) \triangleright	5	先行隣接 T にリンク	強い
	(14) \triangleleft	4	先行隣接 T にリンク	弱い (内容を導入)
④T の先送り 聞き返し	(15) \triangleleft	1	先行隣接 T にリンク	ほとんどない
	(16) \rightarrow	2	先行隣接 T にリンク	非常に弱い
⑤協力要求や理解チェック	(17) \Rightarrow	2	自分の先行 T にリンク	弱い

レスポンス的側面は、先行する発話、またはそれまでに話された内容のどこに、どうリンクするかを判断する。その観点は次の通りである。通常の会話の流れに自然に沿った (無標の) 発言とは、直前の相手のターンの、その時話されている内容についてリンクするものである。したがって、ターンのリンク先が直前の隣接先行ターンを飛び越えた先行ターン (\triangleright 表中②) や、自分のターン (\triangleleft 表中③) や、目下話されている内容に関係のない部分 (\triangleright ④) の場合を有標とし、カテゴリーへの分類に反映させている。また、最小応答することでターンを取らない場合や、聞き返す場合もある (\rightarrow ⑤)。これらの観点からターンの先行・後続ターンのリンクの仕方を調べ、記号を組み合わせるコードをつける⁶。本稿では、新規に 1 カテゴリーを加えた (表中⑥、カテゴリー記号は (17))。また、相手のターンの途中で聞き手が示す「傾聴表示」(西阪 2005) は、1 ターンにカウントしなかった。

各カテゴリーは、そのイニシアチブの強さによって 6 段階の評価点を与える (表 2 参照)。

表 2 評価点と主な該当ターンのタイプ

評価点	該当する主なターンの特徴
6	それまでの談話の流れにリンクしない新しい内容についての応答要求等
5	それまでの談話の流れにリンクしない新しい情報の導入や、先行隣接ターンにリンクしない相手からの応答要求等
4	相手の話の内容を踏まえた質問等の応答要求等
3	相手の質問への応答、相手の発話への情報の付加等
2	相づちや最小応答等
1	発話機会のパス等

最後に、それぞれの評価点に該当するターンの生起数を集計し、グラフ化することによって、各参加者の連鎖から見た参加の様相を把握する。

2.3.2 IR 分析による接触場面会話の分析

IR 分析を用いた接触場面の研究には、一組の

留学生と日本人学生の自由会話を対象に、参加の様相の変化を示した岩田 (2005)、NNS 同士のやり取りを分析した岩田 (2007) がある。岩田 (2005) では、やり取りの前半部分の質問と応答が繰り返され、参加の仕方が非対称的だったが、やり取りを通して共通基盤が構築されるに伴い、対称的になる様子を明らかにした。参加の様相の動的な変化を視覚的に把握できることを示したが、分析対象が 1 組であったため、さまざまな参加の性質を探ることができなかった。また、岩田 (2007) では、NNS 同士のペアを対象に、参加者が自分のターンを評価点のカテゴリーにどう配分するかを 3 つのパターンで示した。そして、両参加者のパターンの組み合わせを参加の対称性、非対称性の目安とした。その結果、NNS 同士の会話参加が全体的に対称的になる傾向があり、それらのペアには、スムーズなトピック展開、発話の重なり、笑い等、活発なやり取りを示す特徴が観察された。そして、対称的な参加には、評価 3 (相手の発話への情報付加) の割合が重要な働きをしていることを示唆した。この結果を踏まえ、NS と NNS のデータを分析することで、接触場面の参加の特徴がより深く把握できると考える。そこで、本稿では、NS と NNS の複数のペアの会話を対象に、IR 分析を用いた分析を行う。

3. 研究の目的

本稿では、IR 分析を用いて留学生と日本人学生の自由会話を発話の連鎖から分析し、その参加の対称性と非対称性の特徴を探ることを目的とする。そして、得られた結果を基に現場での会話活動をデザインする際に必要な新たな視点を提供することを目指す。

4. 研究方法

4.1 参加者とデータ

データは、NNS (日本語が OPI, oral proficiency interview で中級レベルの留学生) 5 名が NS (日本人大学生) と同性同士でペアを組み、10-20 分間の自由会話の文字化資料⁷である。今回は、各データの冒頭 200 ターンをカテゴリーへ分類した。

参加者のうち、NNS は女性 4 名 (独語 NS 2 名、露語 NS 1 名、韓国語 NS 1 名) と、男性 1 名 (独語 NS) で、全員 20 代である。NS は、

20 代の女性 4 名と 10 代後半の男性 1 名である。収録当時、NNS は都内某大学の日本語講座に在籍しており、NS はその講座に交流目的で定期的に参加していた。ペアを組んだ参加者は会話授業や行事を通して顔見知り程度の既知関係にある。録音録画は 2003 年 6-7 月に筆者立会いのもと、授業と同じ教室で行った。

4.2 IR 分析を踏まえた質的分析の観点

Linell et al. (1988) は、IR 分析が「コミュニケーションの生態に注目する妥当性のある質的分析」のための出発点となりうることを述べている。本稿では、参加者が相手の発話をどう受け止め、どう展開することで相手と協力し合っているのか。この点を明らかにするために、トピック⁸展開に焦点を当てて行なった。なぜなら、トピックは、参加者間で協同的に展開される (Linell 1998; Maynard & Zimmerman 1984) ものであり、連鎖と参加の構造密接に関連している (Korolija & Linell 1996; Maynard 1980) と考えられるからである。

5. 結果と考察

5.1 全体的な傾向

IR 分析によって発話をカテゴリーに分類した結果、次のようなターン配分の特徴が見られた。NS も NNS も、評価 2 (主に最小応答やあいづち)、評価 3 (相手の発話内容を踏まえて新情報を付加するターンなど)、評価 4 (相手の発話内容に関する質問など) の 3 つのカテゴリーに自分の持分のターンの 9 割近く (NS 89.6%、NNS 88.6%) を配分しており、一つのカテゴリーへの集中的な配分はなかった (図 1)。

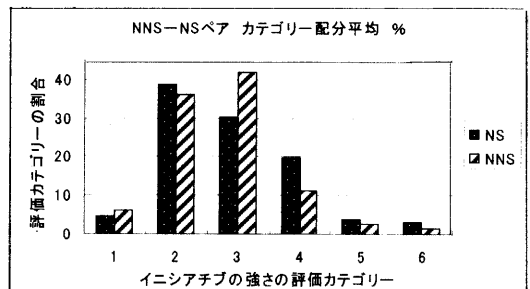


図 1 評価カテゴリーへの配分

参加者がターンを評価 2,3,4 のカテゴリーにどう配分していたかを見ると、(1) 評価 3 が最も高

い (2) 評価3が低く、評価2と4の配分が高い、
 (3) 評価2が最も高く、評価3,4の順で低くなる、というパターンが見られた。本稿では、それぞれ (1)「自発的情報付加型」、(2)「質問+応答型」(3)「受け止め型」とした。

2人の参加者がやり取りを通して自分の持分のターンを同じカテゴリーに同じような割合で配分すれば、ターン配分パターンが一致する。反対に、異なったカテゴリーに異なった配分をしていれば、配分パターンは違ったものになる。このパターンの一致・不一致を参加の仕方の対称性・非対称性の目安とする。

今回の5組のペアでは、2組が「受け止め型」で一致し、3組が「情報付加型」と「質問+応答型」(2組)、「情報付加型」と「受け止め型」(1組)で一致しなかった。このことから、必ずしもNSあるいは、NNSであることで参加の仕方が決まるのではなく、参加者同士の局所的振る舞いによって多様な参加の様相が現れることがわかった。

5.2 パターンが一致したペアの参加の特徴

今回パターンが一致した2組のうち、語彙表現に関する意味交渉があまり起こることなくトピックが展開したエレーナと幸子のペアを取り上げる。

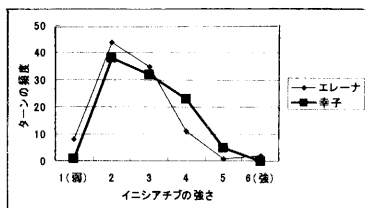


図2「受け止め型」で一致

このペアは、評価3と評価2の割合が双方とも高い割合となっており、互いの発話を踏まえた新しい情報が双方から提供され、それをお互いに受け止め合っていたことを示している。だが、NSの幸子のほうが評価4が高いことから、相手から発話を引き出そうとする傾向が強かったことがわかる。データ1は、その特徴を示している。会話データの右にある記号は、表1のカテゴリーの記号、数字はイニシアチブの強さの評価点である。

【データ1】E：エレーナ、S：幸子

	記号	評価
01 S	(.)どうだった?	=> 4
02	き [れいだった?]	
03 E	[あ:°	<Λ 3

04	おもしろかった°		
05 S	おもしろかった	<	2
06 E	.hh でも::その::トップ::	<Λ	3
07	富士山 [のトップ:に::		
08 S	[うん		
09 E	.h あ::その下は::う::ん		
10	ちよっと:: う::ちよっと		
11	見なかつ [た		
12 S	[見なかつた?	=>	2
13 E	うん 見なかつた うん		
14	その くも くも?	=->	2
15 S	くも	<	2
16 E	くも たくさん	<Λ	3
17	見なかつた		
18 S	そうなの すごいねえ	<Λ	3
19 E	うん でも.h あ::幸子	..Λ	4
20	ちゃんは::		
21 S	うん		
22 E	あ::#のイレイン イレイ		
23	[ンさんと		
24 S	[うんうん		
25 E	いっしょに [行く		
26 S	[そう hh	<Λ	3
27	[行くっ [て約束 う::ん		
28 E	[hhh [予定がある	=>	4
29	ね?		
30 S	そう	<	2
31 E	あ:: [hh	<	2
32 S	[がんばんきゃ:	..Λ	4
33	あ [たしも		
34 E	[う::ん	<	2
35	(.)		
36 E	いつ?	<>	4
37 S	今週 たぶん	<Λ	3
38 E	はあ: ほんと?	=>	2
39 S	たぶん (0.5) うん	<	2
40 E	はあ::	<	2
41 S	たぶん hhh でも	..>	5
42	暑かった?:		
43 E	う::ん	-	1
44 S	寒かった?	=>	4
45 E	うん でも その .h	<Λ	3
46	あ:: 登る? あ:: 登る		
47	と あ 時に:その 寒い (後、省略)		

このペアのやり取りを見ると、一方が話し手としてターンを取っているときは、もう一方は聞き手に徹し、積極的な受け止めや質問で相手の発話を促していることがわかる。発話1-18では、この会話の前から続くエレーナの富士山登山の話が幸子の質問(01-02S)、繰り返し(05S)、聞き返し(12S)、評価(18S)等で積極的に受け止められながら展開されている様子が見える。

幸子の評価が述べられた後、19Eでエレーナが幸子も富士山に行く予定があることに言及する。

目下のトピックの流れの中で「自分が知っている、相手に関する情報を出すことで、相手から自発的に情報提供することを促し」(Pomerantz 1980: 187)ているといえよう。このような相手が話し出すのに適切な「行為スペース」を与える方法(串田 2001)を用いて、スムーズにフロアを幸子に移している。しかし、ここで幸子は、あまり自分の話を展開せず、「暑かった？」(42S)、「寒かった？」(44S)という、先行談話に関連付けることで初めて理解できるような質問をする。この、前の談話に引き戻す幸子の質問は、エレーナが登山の物語をまだ十分に語っていないことを主張していると考えられる。

この後、エレーナによって登山の話が続けられ、その話題終了後、幸子は、自分の夏休みに近場しか言っていないことを自分から述べる(会話例は省略)。エレーナは、それに関連付けて幸子と共通の友人の旅行について自分が断片的に知っていることを尋ね、今度は幸子が主たる話し手として話し、その内容をエレーナが積極的に受け止めるという展開になった。

エレーナと幸子は、相手と自分の共有する事柄に焦点を当てつつ、互いに質問等でフロアを取るスペースを与え合い、話し手のときは、そのスペースを十分に利用して話すことで、聞き手のときは、積極的に相手を支援することで、談話推進に貢献していた。談話展開の仕事を両方が受け持つという関わり方が、パターン的一致、特に評価 3、2 の高い割合での一致に現れている。このペアには、スムーズなトピック展開の他に、協調的重なりや相手の発話の完成、笑い等、岩田(2007)の留学生同士でターン配分が共通していたペアに見られた活発なやり取りの特徴が観察された。

5.3 パターンが一致しなかったペアの参加の特徴

(1) 「情報付加型」と「受け止め型」

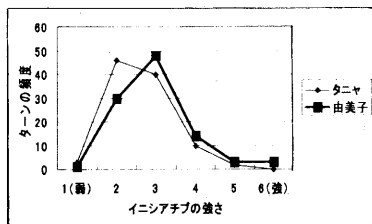


図3 「情報付加型」と「受け止め型」のペア

このペアのターン配分は、評価 2 の割合は異なるが、評価 3 と 4 には大きな差が見られない。また、全体に占める評価 3 の割合が両者とも高い。

会話参加の特徴としては、由美子による会話の方向づけ、相手と自分の会話参加の調整、そしてタニヤによる受け止めと支援が挙げられる。

【データ 2】 T: タニヤ、Y: 由美子

01	Y	° そっか°	>	6
02		[え タニヤさんって=		
03	T	[° ね°	<	2
04	Y	=何年生だっけ		
05	T	.h 今2年生	<	2
06	Y	あと2年間じゃあ	<>	4
07	T	そうそ[う	<Λ	3
08	Y	[9月から いっ[て	=Λ	3
09	T	[うん	<	2
10		[4年		
11	Y	[そっかあ	<Λ	3
12		(1)		
13	Y	いいねえ		
14	T	ねえ:: [ねえねえねえ	<	2
15	Y	[あたしは9月に	<Λ	3
16		卒業(..) だか[ち		
17	T	[あ9月	<	2
18		う:[::ん		
19	Y	ん [はたらかない(..)	<Λ	3
20		はhたhらかhない		
21		h[といけないhh		
22	T	[そう		
23		どんなしごとしたいの:?	<>	5

由美子は 01-04Y で、まずタニヤに学年を問うことで、卒業まであと2年であることを引き出し、15-21Y で自分の仕事の話までの流れを組み立てている。そしてタニヤは 22-23T でそのトピック化の試みを的確に取り上げている。このやり取りにも、データ 1 と同様、相手の事情と関連付けながら、談話を展開しようとする様子が窺える。

このペアのやり取りには、談話の流れの大枠を由美子が作り、タニヤがそれに協力するという非対称性が見られるが、スムーズなトピック展開と協調的重なりや相手の発話の完成、笑い等、活発なやり取りの特徴が観察された。これは、全体に占める評価 3 の高い割合、すなわち両者から談話推進のリソースが提供されていたことが関係していると思われる。そして、それには、由美子の談話展開に見られる相手との共通基盤に基づいたやり取りへの志向が関係していると考えられる。

(2) 「情報付加型」と「質問+応答型」

今回のデータでは、この組み合わせになった 2 組のうち、際立った非対称的参加になったハイケ

と百合子のペアを中心に述べる(図4)。

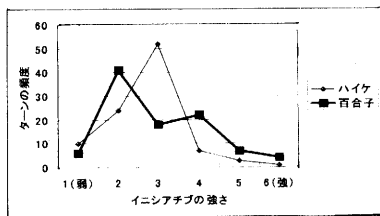


図4「情報付加型」と「質問+応答型」のペア

このペアは、評価2,3,4の3つすべてのカテゴリ配分に差があり、参加の仕方に強い非対称性があった。また、これまで見てきたペアと異なり、沈黙や発話権のパスが頻繁に観察され、笑いはあまり観察されなかった。

データ3は、ハイケが京都旅行の際に見た歌舞伎の話に続くやり取りで、その特徴が観察される。

【データ3】H:ハイケ、Y:百合子

- | | | | |
|------|--------------------|-----|---|
| 01 H | ま 日本の文化 日本の文化 | ..Λ | 4 |
| 02 | という授業[で:: たくさん: | | |
| 03 Y | [うん | | |
| 04 H | 歌舞伎(0.6)見た:[この | | |
| 05 Y | [うん | < | 2 |
| 06 | (1) | | |
| 07 H | おもしろ:い [と思った | =Λ | 3 |
| 08 Y | [あ: | <> | 4 |
| 09 | みんなで行った::? | | |
| 10 H | (0.5) | — | 1 |
| 11 Y | う [ん この::: | => | 4 |
| 12 | [みんなで行ったの: | | |
| 13 H | このクラスは:: みんな | =Λ | 3 |
| 14 | 留学生だか[ら | | |
| 15 Y | [うん | | |
| 16 H | ま あまり:日本の文化に | | |
| 17 | つい [て:: あ | | |
| 18 Y | [うん | | |
| 19 H | ちいさ:[(..)知識は:[(..) | | |
| 20 Y | [うん [うん | | |
| 21 H | あまり:: hhh[(..) | | |
| 22 Y | [あああ: | | |
| 23 H | あ::(..)持つてな::い | | |
| 24 Y | う:ん | < | 2 |
| 25 H | ですから::[(..)たたくさん | =Λ | 4 |
| 26 Y | [う:ん | | |
| 27 H | [(..)映画::とか[(..) | | |
| 28 Y | [は::ん [うん | | |
| 29 H | 雑誌をみ- | | |
| 30 Y | み- 調べ [て: | :Λ | 4 |
| 31 H | [うん 調べて | <Λ | 3 |
| 32 | [()おもしろ:い | | |
| 33 Y | [そっかそっか::へえ::: | < | 2 |
| 34 H | うん だから行きたい | =Λ | 3 |
| 35 Y | ふ:ん そうだね:: | < | 2 |
| 36 H | d'も 京都は: | ..Λ | 4 |
| 37 | ほんとにきれいだ | | |

38 Y ふ:::ん そうだね:: ..> 5

39 ハイケちゃん 歌舞伎:を見て::

40 意味わかる:?

ハイケは、01-04 で授業で行った歌舞伎鑑賞についてトピック化し、そのときの感想を 07H で述べるが、百合子はハイケ個人に焦点化するのではなく、この活動の形態や活動方法に注目した質問をする(09Y、12Y)。ハイケは、0.5秒の沈黙の後、百合子の質問に答え、13Hで「みんな」という表現を繰り返すことで百合子の質問に受け、自分自身からクラスのメンバー全員へと話題の焦点を移している。

ハイケがクラスの説明をする途中、百合子は30Yで日本語の表現を修正する。しかし、ハイケの話の内容についての評価や感想をいうことで展開することが可能な箇所(24、33、35Y等)では最小応答しか返さない。話し手のターンが話者交代に適切な箇所(transition relevance place)にきたときに、続きを促す「懇請 solicit (筆者訳)」がない、あるいは相づちのみの反応が続くとトピックは終結に向かう(Maynard 1980)。相づちが聞き手の支援ではなく、「その内容について言うべきことはない」ということの表明であり、ときとして関心の低さを表明することになるためであろう。ハイケは、それ以上歌舞伎について語ることをやめ、36-37Hで先行談話の内容へのリンクを通してトピック転換を試みている。しかし、百合子はそれを再び最小応答(38Y)で受け止めることでトピック化せず、再度歌舞伎に焦点化した質問(39-40Y)をしている。このペアのトピック展開には、これまでのペアと違い、全体を通してぎこちなくなっている様子が窺える。

これまで見てきたように、百合子は、ほとんど自分のターンを相手からの情報の引き出し(評価4)とハイケの発言中に打つ相づちと受け止め(評価2)に使っている。そして、質問に対してハイケが応答しても、それについて自分自身の評価や意見、情報などの新しい内容の提供、つまり評価3のターンの割合が極めて低い。

一方、ハイケの場合、百合子の質問に対して最小応答だけでなく、自発的に情報を付加した応答(評価3)をしている。また自分のことをトピック化することで談話を展開している。しかし、百合子に対して共有できるようなトピックの展開の

ために働きかけることはない。この点で、先述のエレーナやタニヤが積極的に相手から応答を引き出そうとしていたのと異なっている。百合子からの内容の導入が低くなる背景には、ハイケの参加の仕方が深く関係しているのである。

今回のように特定の目的を持たない自由会話においては、相手の先行隣接ターンの内容が談話を推し進める重要なリソースになる (Foppa 1990)。したがって、このペアのように、提供されるリソース量が非対称的だと、スムーズなトピック展開が困難で、内容も深まりにくくなる可能性がある。

以上のような微視的レベルの係わり合い方が積み重なった結果、百合子の質問が展開の方向の大枠を決め、ハイケから提供される情報で談話が展開されるという非対称的な様相になったといえる。

5.4 今回の会話活動と参加の様相の関連

Linell (1998) によると、やりとりの性質はその活動のタイプを反映するものであり、特にターン交代のパターンは、その活動や状況がどういふものかを示す目安になるという¹⁰。そして、実際の活動におけるやり取りは、実施者の意図や計画に沿って展開するとは限らず、その会話活動を参加者がどのように解釈し、参加するかにかかっている (Mori 2002)。本稿の参加者は、この会話活動をどのように捉えていたと考えられるだろうか。

今回のデータでは、顔見知りの関係にある学生同士の自由会話が対象であり、参加者は互いの近況等について質問や新しい話題を提供し合うことで「学生同士の雑談」として活動を作り上げていたように見える。

しかし、図1の評価4の割合の違いや、5.3の(2)のハイケと百合子のやり取りにも見られるように、相手から発話を引き出そうとする等、相手の参加を優先する傾向は、日本人学生のほうがやや強いという傾向が観察された。

その背景には、今回の収録が授業で使っている教室で、教師も同席して行われたことで、教室活動の延長としての意味合いがやり取りに影響したという可能性がある。つまり、日本人学生がこの会話活動の持つ言語学習の側面に敏感であり、「留学生と日本人が日本語を使う活動」として捉え、なるべく留学生に発言の機会を提供しようとしていた可能性が考えられる¹¹。

5.3の(2)の百合子のように、相手から発話を引

き出すことに偏り、自分から新しい情報を談話に持ち込むことをほとんどしない場合、留学生は、質問に答えることでその「話す」機会が確かに確保される。その反面、会話を展開するためのリソースが相手から提供されないため、相手の発話を踏まえて新たに談話を進めていくという会話参加の機会を失っている可能性がある。

5.5 会話教育の活動をデザインするための示唆

今回の結果を踏まえた活動デザインへの示唆として、次のことがあげられる。特に今回の参加者のような初～中級のNNSとNSを対象とした会話活動をデザインする、あるいは教室での会話活動の問題点(例えば、沈滞しがちなペアのやり取りの原因を探る等)を分析する等の場合、NSが話す内容がNNSの自発的参加のリソースになりうることを視野に入れる必要がある。また、対称的参加の様相を示したペアのやり取りでは、参加者間で共通する事柄を踏まえて互いの参加を調整していたことから、会話活動を日本語使用の場として捉えるのではなく、共通基盤構築を構築し、人間関係を作るプロセスとして捉えることが大切であると考えられる。このことを活動デザインに反映させるには、例えば、いくつかの段階に分けた課題をこなすことで互いに共有できる事柄が発見でき、やり取りの内容を掘り下げていけるような活動にする等が考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、IR分析によって発話の連鎖の観点からカテゴリーに分類する意義を提示した。そして、留学生と日本人学生の自由会話の量的な分析により、参加の対称性と非対称性の特徴を視覚的に把握できることを示した。IR分析で得られたターン配分パターンの組み合わせから、多様な対称的、非対称的参加の様相があることがわかった。

データの質的分析から、パターンが一致しなくても両参加者の新しい内容を付加する評価3のターンの割合が高ければ、対称的参加に似た特徴が見られることがわかった。対称的な参加の特徴を持っていたペアのやり取りでは、日本人学生と留学生は、互いの共通する事柄を踏まえつつ、適切なタイミングで相手に働きかけてフロアを譲り合い、その発話を受け止め合っていた。非対称的なやり取りでは、日本人学生と留学生は、情報を一

方が一方から引き出しており、互いの共通する点を踏まえての展開は見られなかった。

今後の課題としては、やり取りの構成人数、NNSの言語レベルや出身文化圏、やり取りが行なわれる活動が参加の様相にどのような影響をもたらすかを調べる事が挙げられる。また、データの質的分析の充実も重要であろう。

注

1. 接触場面とは、言語コード規範、コミュニケーション規範、社会文化的規範を共有しない参加者間のインターアクションをさす。それに対し、母語場面とは、これら3つの規範を共有する共同体の成員間のインターアクションを指す (ファン 2003:301)。
2. これらの概念に近いものに、「非対等性 (inequality)」「対等性 (equality)」がある。これらは、主にやり取りの背景にある条件、例えば、知識の分配に見られる不均衡や社会的地位等の違いをさすという点で、対称性・非対称性と使い分けられている (Linell 1990: Linell & Luckmann 1991)。
3. 例えば、参加者Aの質問や話題導入は、他の参加者に受け止められ、展開されることもあれば、無視されることもあるだろう。一つ一つの振る舞いをやり取りの流れから切り取り、カテゴリー化する方法では、その振る舞いが相互行為の中でどのような意味を持つのかが見えなくなるという問題がある。
4. ただし、BがAにしたものが相手の話を踏まええない唐突な質問や情報提供であれば、非対称的になると考えられる。
5. IR分析のルールの詳細は、岩田 (2004) を参照。
6. Linellらは、話題導入に先行する発話と話題を終了させる発話のカテゴリーも作っているが、それらに該当する発話の同定が困難なこと、また、今回のデータにほとんど見当たらなかったことから、本稿では使用しなかった。
7. 好井・山田・西阪(1999)を参考に筆者が作成した文字化ルールを用いた。各記号の意味は次の通りである。「[」: ことばの重なり、「¥」に挟まれた発話: 笑いを含んだような調子、「(数字)」: 沈黙の秒数、「(.)」: ごく短い間合とそれより若干長いもの、「:」: 直前の音の延び、「?」: 語尾の音の上昇、「.」(ピリオド): 語尾の音の下降、「hhh」呼気音 (主に笑い)、「hhh」: 吸気音、「_」: 下線、強い語勢、「。」で挟まれた発話): 小さい音量、「'」: 促音ではないところで詰まったようになっている音 (母音脱落なども含む)、「-」: 直前で途切れている。
8. 「トピック」とは、通常用いられる「談話における『~について』」(Linell 1998: 181) という緩やかな定義とする。
9. 好井 (1991) では、男女の自由会話における「支持作業」としての相づちを比較し、適切な個所での内容についての質問を、聞き手の積極的な関与の証拠としている。そして、男性が話者の順番交代が適切な箇所 (turn-transition relevance place) で最小応答を繰

- り返す例をあげ、非「支持的」作業ととらえている。
10. 例えば、質問と応答の繰り返しのパターンは、警官の尋問やセラピー、インタビューなどの活動と結びついている。
 11. 一二三 (1999) は、NSとNNSのやり取りでは、NSが自分の発言について、「一方的に情報を与えたり、相手の発話に評価を加え」たりすることになると危惧し、相手の会話参加の妨げになる(p. 88)ことを配慮する傾向があると指摘している。

参考文献

- 岩田夏穂 (2004) 「非母語話者が参加する相互行為の対称性と非対称性について-イニシアチブ-レスポンス分析の試み-」(未公開)お茶の水女子大学人間文化研究科修士論文
- (2005) 日本語学習者と母語話者の会話参加における変化-非対称的参加から対称的参加へ-。『世界の日本語教育』15, 135-151. 国際交流基金。
- (2007) 「非母語話者同士の会話参加の様相-留学生の自由会話の場合-」『人間文化論叢』9, 175-187.
- 串田秀也 (2001) 「私は-私は連鎖: 経験の「分かちあい」と共-成員性の可視化」、『社会学評論』52(2)
- 西條美紀 (2005) 「接触場面の非対称性を克服する会話管理的方略」『社会言語科学』8(1), 166-180.
- 西阪仰 (2005) 「反応機会場と連続子: 文のなかの行為連鎖」『2004年度社会学部付属研究所一般プロジェクト成果報告』1-13.
- 一二三朋子(1999) 「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連」『教育心理学研究』47, 490-500.
- ファン, S. K. (2003) 「接触場面のタイポロジーと会話参加社の言語管理」『日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成 論文集』2, 300-308. 国立国語研究所
- 好井裕明 (1991) 「男が女を遮る時」山田富秋・好井裕明編著『排除と差別のエスノメソドロジー』新曜社, 213-249.
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰(1999) 『会話分析への招待』世界思想社
- Beebe, L. M. & Giles, H. (1984) Speech accommodation theories: a discussion in terms of second language acquisition, *International Journal of Social Language*, 46, 5-32.
- Fan, S. K. (1992) Language management in contact situations between Japanese and Chinese, Unpublished Ph.D. Dissertation, Department of Japanese Studies Monash University, Australia.
- Foppa, K. (1990) Topic progression and intention, In I. Markova and K. Foppa(eds.), *The Dynamics of Dialogue.*, New York, Harvester Wheatsheaf, 178-200.
- Jefferson, G (1972) Side sequences. In D.N. Sudnow (ed.) *Studies in social interaction*, New York, NY: Free Press,

294-338.

- Korolija, N. & Linell, P. (1996) Episodes: coding and analysis coherence in multiparty conversation, *Linguistics*, 34, 799-831.
- Linell, P. (1990) The power of dialogue dynamics, In I. Markova and K. Foppa(eds.) *The Dynamics of Dialogue*, New York, Harvester Wheatsheaf, 147-177.
- Linell, P. (1998) Approaching dialogue. Amsterdam, John Benjamins Publishing Company
- Linell, P., Gustavsson, L. & Juvonen, P. (1988) Interactional dominance in dyadic communication: a presentation of initiative-response analysis, *Linguistics*, 26, 415-442.
- Linell, P. & Luckmann, T. (1991) Asymmetries in dialogue: some conceptual preliminaries, In I. Markova and K. Foppa(eds.), *Asymmetries in Dialogue.*, New York, Harvester Wheatsheaf, 1-20.
- Marková, I. & Linell, P. (1996) Coding elementary contributions to dialogue: individual acts versus dialogical interactions, *Journal for the Theory of Social Behavior*, 26(4), 353-373.
- Maynard, D. W. (1980) Placement of topic change in conversation, *Semiotica*, 30 (3/4), 263-290.
- Maynard, D. W. & Zimmerman, D. H. (1984) Topical talk, ritual and the social organization of relationships, *Social Psychology Quarterly*, 47 (4), 301-316.
- Mori, J. (2002) Task design, plan, and development of talk-in-interaction: A study of a small group activity in a Japanese language classroom., *Applied Linguistics*, 23, 323-347.
- Pomerantz, A. (1980) Telling my side: "Limited Access" as a "Fishing" Device, *Sociological Inquiry*, 50, 186-198.
- Woken, M. D. & Swales, J. (1989) Expertise and authority in native-non-native conversations: the need for a variable account, In S. Gass, C. Madden, D. Preston and L. Selinker(eds.), *Variation in Second Language Acquisition: Discourse and Pragmatics*, Clevedon, Multilingual Matters, 228-244.
- Zuengler, J. & Bent, B. (1991) Relating knowledge of content domain: an influence on native-non native conversations, *Applied Linguistics*, 124, 397-128.

いわた なつほ /お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科
natsuhoiwata@kjps.net

The Symmetrical and Asymmetrical Features of Participation in Free-conversations between Foreign students and Japanese students

IWATA Natsuhō

Abstract

The purpose of this study is to explore how symmetrical and asymmetrical features of participation in a native speaker and a nonnative speaker of Japanese are jointly constructed. The data of dyadic free-conversations in Japanese by five pairs, consisting of one foreign student (middle-level Japanese learner) and one Japanese university student respectively, are quantitatively analyzed using a coding system known as Initiative-response analysis based on the local turn sequence. The data is then analyzed qualitatively by focusing on conversational topic development to explore how the aspects of participation are constructed.

The combinations of turn-distribution types reveal both symmetrical participation and asymmetrical feature of participation. This results show that the symmetrical and asymmetrical feature of participation is not subject to the difference of language competence of participants but how the information which becomes resource of developing the talk is supplied by both participants.

【Keywords】 free-conversation, contact-situation, foreign students and Japanese university students, symmetrical and asymmetrical feature of participation, Initiative-Response analysis

(School of Japanese Studies in a Global Perspective, Graduate School, Ochanomizu University)